

むらっちさんが書き下ろしたバイクの短編小説

Def busta



むらっち 作

33

Def busta

デ フ バ ス タ

~ 第 1 章 ~

カービート北海道支局

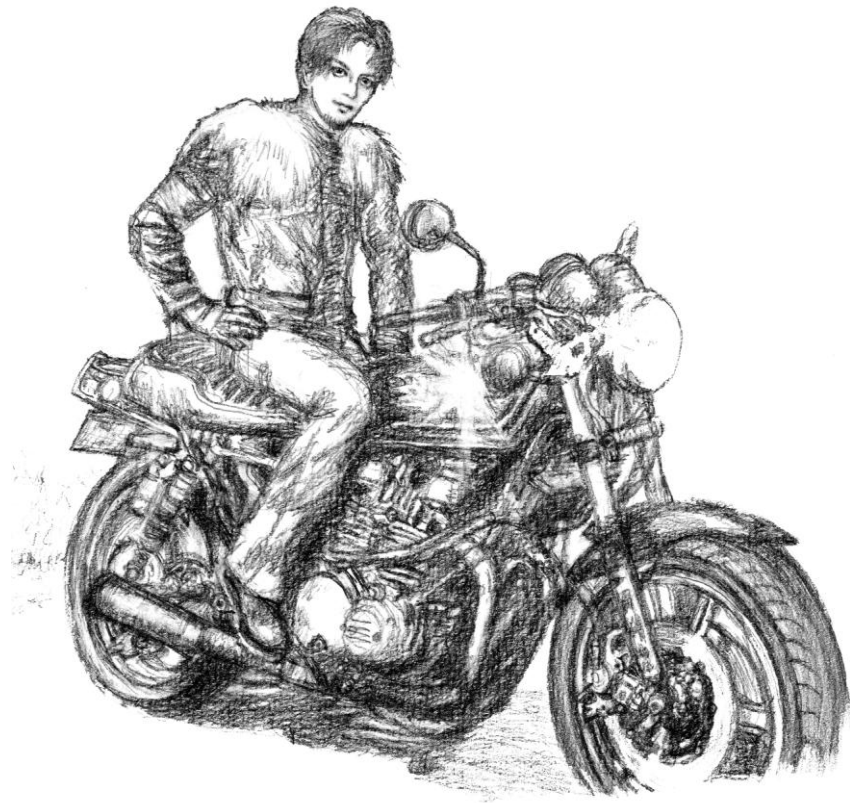
支局長 むらっち 2 著

Def busta 第 1 章

あらすじ

腕っぷしが強く、仲間思いでバイクが大好き。そんな主人公・Def busta 下村（デフバスタ）が、北海道を舞台に、バイク乗り達との出会いや別れ、交流と対立を描く、バイクアクションストリー。。

登場人物



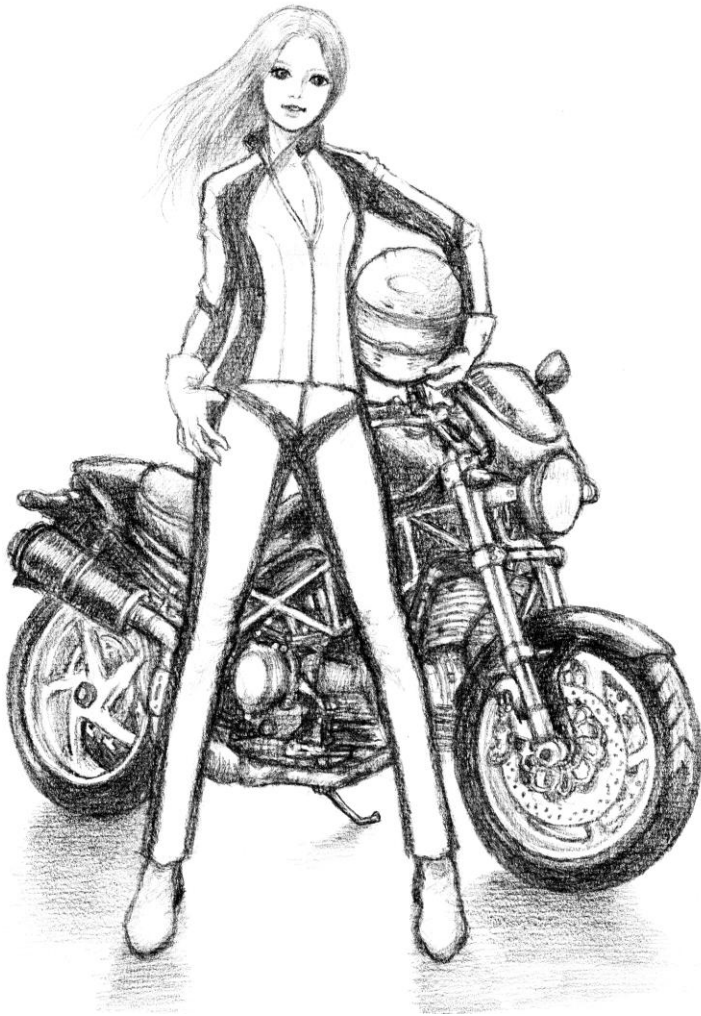
● 下村 貴 しもむら たかし (22 歳・男)

イメージキャラ・坂口憲二。

本編の主人公。フルカスタムでスカチューンが施された Kawasaki Z1000MK2 改を駆る。

過去に Def busta 下村 (デフバスタ。スラングで「イケてる悪ガキ」と呼ばれていた事がある。

● 南 條 零 なんじょう れい（22 歳・女）通称レイ
イメー ジ キャ ラ ・ E-girls 佐 藤 晴 美
零 戦 開 発 者 で あ り 、 自 動 車 メ ー カ ー MBM
社 の 元 4 代 目 社 長 ・ 南 條 輝 彦 の 隠 し 子 。 現
在 は 南 條 家 に 正 式 に 迎 え 入 れ ら れ 、 跡 取 り
扱 い と な っ て お り 、 MBM 社 を 母 体 と す る 新
興 バ イ ク メ ー カ ー 「 KAMUI 」 の 開 発 エ ン ジ ニ
ア 兼 テ ス ト ラ イ ダ ー で も あ る 。 南 條 姓 と な
る 以 前 の 旧 姓 は 二 宮 。



● 堀井士郎 ほりい しろう（88歳・男）

イメージキャラ・津川雅彦。

過去、南條輝彦と共に零戦開発に携わったエンジニア。新たな時代の「零（ゼロ）」を造るため、本社から特命を受け、高齢ながらも、KANUI 零の開発に取り組む。

● 大男のアラブ系外国人（85歳・男）

通称ハンマー。イメージキャラ、ボブ・

サップ

バイクメーカー、E社と手を結んだ、石油

輸出大国の作業員。KANUI 社に対し妨害工作

をする。怪力でねじ伏せる、ボクシングベ

ースの格闘家でもある。

また、銃部品の名称で呼び合う4人の仲

間、フロントサイト、グリップ、トリガー

バレルを引き連れるリーダーでもある。

● 小男のアラブ系外国人（85歳・男）

通称ブリッド。イメージキャラ、ウェズ

リー・スナイプス
バイクメーカー
HE社と手を結んだ、石油
輸出大国の工員。KAMUI社に対し妨害工作
をする。大男との連携攻撃を得意とし、足
技主体の格闘技を得意とする。

零

北海道十勝管内OT町。雷鳴轟く深夜の格納庫。そのバイクは、まるで天の祝福を受け、たかのごとき、雷鳴のファンファーレと共に産声をあげた。

そこはMBM社・十勝研究所・第3格納庫。薄暗がりのなかシルエットの《KAMUI 零》を取

り囲む南條零（25歳）と堀井士郎（28歳）、ほか多数の作業員がたたずむ。

そのとき、建物全体が激しく揺れる程の雷鳴が再度響き渡り、高所窓から差し込んだ光

で、“KAMUI 零”の姿が照らし出された。

そして堀井が両腕を掲げ叫ぶ。

「完成だ！世界で唯一無二のバイク！新たな零（ゼロ）の誕生だぁー！ー！ー」

邂逅

北海道帯広市の繁華街。その賑やかな雰

気の中、下村貴（22歳）がZ1000MK2を、ストッ
ピーからのジャックナイフターンで、フロン
トタイヤを軸にクルッと向きを変え、バイク
をピタッと停車させ、満足げな表情でヘルメ
ットを脱いだ。まだ幼さの残る中性的な面立
ちだが、その鋭い眼光には強い意志が感じ取
られる。その時だった。下村の眼前で信じられ
ない出来事が起こった。突如、前方からかなり
スपीードで、HONDA CBR1000XX（通称・スーパ
ーバイクバード）と、正体不明の黒塗りのバイ
クが走って来た。ラックバードの進路を妨害す
るように、すぐにブレーキを踏んでアクセルタ
ーンを用いて“クルッ”と向きを変えたのだ。
目を見開き驚愕の表情をみせる下村。2台の
バイクは、繁華街の雑踏を切り裂くように、
激しいスキール音を立てた。“スーパ
ーバイクバード”は、思わずパニックブ

レーキを握ったのだろう、フロントタイヤが
左にスリップダウンしてしまい、コントロー
ルを失った。そして次の瞬間には、そのフロ
ントタイヤが縁石にぶつかり、前方宙返りす
る形で、けたたましい音をたて、花屋のショ
ーウィンドーに突っ込んでしまった。
下村も含め周囲にいた人達は皆あっけに取
られ、しばし無言のまま傍観。その黒塗りの
バイクが“**KAMUI** 零”である事は、まだ誰も気
付いていない。
謎のバイクのライダーは、身体にフィット
したセパレートタイプの革ツナギを着ており、
非常にスタイルの良い、女であるのが見て取
れた。
それから漸くして、我に返った周囲の人が
突然叫び声を上げた。
「きやあー」
女の金切り声が響き渡る。
その声に、少し慌てた革ツナギの女は、ヘ
ルメットを被ったまま、素顔を晒すことなく、

転倒し動かなくなった“スーパーブラックバ
ード”のライダーの元に駆け寄り、背中のリ
ュックサックから、見た事もないような形を
した。“バッテリーパック”を取り出した。
そこへ駆け寄りながら叫ぶ下村。
「おい、おい大丈夫か」
革ツナギの女は下村に一瞥した後、そのバ
ッテリーパックを、**KANUI** 零のエンジン後部に
セットした。V型3気筒エンジン搭載と見え
るが何かが違う。異様な雰囲気伝わってくる。
バイクに跨った女は、左の親指でクラッチ
ホルダー付近の『零（ゼロ）ボタン』を押す
と、アナログ型タコメーター内に、バッテリ
ーマークと、横棒グラフが灯り、80%の容量を
差した。そして無造作にアクセルを開け、バ
イクのリヤタイヤから、激しくスモークを吐
き出す。
「あん、エンジンの音が変わりやがった」

思わずつぶやく下村。
そう、先程聞いたエンジンの音は、2気筒
エンジンの荒々しい音だったのだが、今度は
ジェットタービン音に似ている。いや、それ
よりもっともっと静かな音。それは電気モ
ーターのような軽い作動音であつた。
その女は、あつという間に走り去つていつ
てしまった。
更に驚きの表情で一言呟く下村。
「なんなんだありやこ」
その下村の後方でも、事態は慌ただしく動
き出していた。いつの間にかT社のマクルー
ザーに乗った、アラブ系と思われる外国人3
人が、転倒したライダーを車に乗せ、うち一
人がスーパースラックバードに乗り、ほんの
数秒で、その場からの撤収劇が演じられたの
である。
それを見た下村は、何やら甘く危険な香り
と、抑えきれない高揚感を感じ“ニヤリ”と
口元が笑つていた。

「おいおい何だか知んねーけど、面白そう
な事が始まったじゃねーの♪」

下村は、急いでヘルメットを被りながらバ

イクに跨り、エンジンをかけ、スクランブル

スタートで走り出す。

Z1000MK2も、激しくタイヤスモークを吐き出

しながら、離陸しそうな勢いで加速を始めた

追跡

帯広の市街地を抜け、交通量の多い国道222

号線を疾走する2台のバイク。前方を走行す

る車を右に左に交わしながら、とんでもない

ライディングを魅せる革ツナギの女。その女

を下村は必至で追跡した。

その謎のバイクの動きは、まるで点から点

へ瞬間移動するかのように縫っていく。

IRONを、スラロームで縫っていく。

切れ味あるその走り。それは鋭い刃物で、

空気を切り裂く音までをも連想させられる。

「なんなんだよあのバイクはニまるで重力
を無視したような動きをしてやがるニ」
更に革ツナギの女は、軽やかに前方の車を
交わし、その先の交差点を“フワツ”と右折
した。
やはりその動きは非常に素早く、まるで猛
禽類が獲物を仕留めた後、一瞬でその場を飛
び去る姿にも似ていた。
道路標識『町道●●号線S峠』
「あん？ OT町のS峠に向かってやがるの
か？ ヨッシャー！ ー」
下村は派手にリヤタイヤを滑らせながら、
ドリフトで交差点を右折していった。

レイ

謎の女は、左にウィンカーを上げ、S峠のPAに入っていた。後に続く下村。

「ようやく止まったな。ついて行くのが精一杯だった。」

ヘルメットの中で一息つく。

その少し広めのPAには、街灯が数本立ち並び、新型の三菱スーパードレイトが1台と、デリカバンが停車しており、革ツナギの女と正体不明の黒塗りのバイクの元へ、4名の作業員が駆け寄ってきた。

そのバイクからは、非常に軽いモーター音だけが聞こえている。

ヘルメットを脱ぎ、革ツナギの女に話しかける下村。

「おいおいアンタら：って：」

どうにも様子がおかしい。

「あん、何だよ。」

まるで予想外の展開。その場にいた作業員

達は、下村を取り囲んでしまった。しかもその目には、只ならぬ殺気を帯びている。下村は、ゆっくりとした動きでバイクを降り、拳を握り固めた。『ふんっ、いつ頭の中で警鐘が鳴り響く。』『ふんっ、いつでもいいぜ。』一発触発ってヤツだな。『既に下村の臨戦態勢は整っていた。』
「が、それを見た革ツナギの女は、非常に慌てた様子でヘルメットを脱ぎながら、作業員達を止めた。」
「待ってその人は違うの。」
澄んだ声が響いたのと同時に、ヘルメットからは、長い髪がこぼれ落ち、美しい女の素顔が現れた。
その顔には見覚えがあった。ハトが豆鉄砲とはこのことだ。そして下村の口から出た台詞は。
「ああ、うん。てっ、あ、あれっ、お前、二宮じゃねーか？」
高校生とき同じクラスだった。

的を射ているにも関わらず、この場の状況には非常に滑稽で、素っ頓狂な言葉が口から滑り落ちたのだ。優しく微笑む美しいレイ。下村は軽く混乱した頭で次の言葉を探していた。しかし懐かしの再会は、後方から聞えてきた。クルーザーの激しいスキル音が、全てをブチ壊した。その場にいた全員が、音の方向へ振り返った。荒っぽくクルーザーが停車し、これまた荒っぽくドアが開き、合計4人のアラブ系外国人が、バットやバールを手に“バタバタ”と降車してきた。そして、その中のリーダー格であろう一人の男が“ニヤニヤ”と薄笑いを浮かべ、片言の日本語を話し出した。この男の通り名は“フロントサイト”という（外国人A）。

「ゼロヲ、コチラニワタセ」

下村以外、その場にいた全員の顔が青ざめ、

う　　深　　た　　の　　だ　　戦　　て　　バ　　ー　　ほ　　最　　意　　「　　し　　そ　　「　　フ　　出　　冷
な　　い　　。　　男　　が　　慄　　襲　　ッ　　、　　ど　　悪　　味　　●　　た　　う　　ソ　　ロ　　し　　汗
下　　皺　　振　　が　　の　　い　　か　　レ　　の　　は　　×　　。　　言　　ン　　た　　を
村　　を　　り　　居　　、　　か　　イ　　部　　分　　▽　　い　　ト　　。　　か
の　　寄　　向　　た　　そ　　か　　に　　の　　な　　く　　サ　　き
姿　　せ　　グ　　の　　う　　っ　　振　　言　　イ　　な　　、　　ら
が　　、　　リ　　だ　　は　　り　　の　　ハ　　が　　“
あ　　憤　　ッ　　か　　い　　か　　レ　　。　　…　　、　　ジ
っ　　怒　　プ　　。　　な　　。　　□　　ア　　リ
た　　の　　（　　い　　。　　　　　ラ　　ジ
　　表　　B　　。　　そ　　う　　、　　こ　　こ　　に　　は　　こ
　　情　　）　　。　　う　　、　　こ　　こ　　に　　は　　こ
　　を　　し　　た　　、　　仁　　王　　の　　よ

溜めをつくつていた自分の腰から、相手の右
たのだが、左ダツキングでそれをかわしつつ
下村の脳天めがけ、ボールを打ち下ろしてき
た。次に正面にいたフロントサイト（A）が
突き飛ばし、バレル（D）に身体ごとぶつけ
下村は、腕を握っていたグリップ（B）を
し、一斉に下村に襲いかかった。
そう言うや否や、全員がおかしな奇声を発
「●×▽く×≡」
またフロントサイト（A）が号令を出す。
きつちりケリをつけてやる」
「はんっ、いいぜえ。なんだか知らんが
下村。その様子を見て不敵な笑みを浮かべる
外国人C、バレル（外国人D）が下村を取り
それからフロントサイト（A）、トリガー（
「●×▽く」
アラブ語で短く号令を出した。
それをみたフロントサイト（A）は、また
「オイてめえ、ずいぶん物騒だな」

脇腹めがけ、強烈な左のショベルフックを打
ち込む。一瞬だった。が、フロントサイト（A
）の身体が宙に浮き、『く』の字に折れ曲が
った。それなりに格闘経験があるであろう彼だが
それは、おおよそ経験した事が無いほどの破
壊的な一撃だった。眼球が飛び出してしまい
そうなるほど瞼を見開き、体の中のもの全てを
吐き出す勢いで胃の内容物をぶちまけ、苦悶
の表情で、そのまま前に倒れていった
それから下村は、左側から大型バールで襲
って来た、トリガー（C）の下顎に、流れる
ような動きで、右鉄槌のバックハンドブロー
を叩き込む。
今度はグリップ（B）とバレル（D）が、
後方からバットで殴りかかってきたが、下村
は間髪を入れず、鋭く独楽のように回転し、
気合一閃。
「だらあー」
バレル（D）の顔面に、右のバックスピ

「
●
×
▽
ゝ
ー」

ブ語で短く叫ぶ

屈辱の表情で、フロントサイト（A）がアラ

それを受け、脇腹を押さえたまま、苦悶と

「オイ、まだやんのか」

鬼の形相で外国人たちを睨む下村。

いた。

ま呆けた表情で“ダラダラ”と鼻血を流して

起きたのか理解できず、バットを手にしたま

てしまったっていた。あまりのスピードに、何が

いっの間にカグリップ（B）は尻餅をつい

た。乾いた音が響き渡る。

れタオルで、激しく弾かれたような音であつ

の高速ジャブを鼻面に打ち込んだ。それは濡

らの一連の動作の中、フリッカ―気味に、右

の勢いは止まらない。バックスピנקックか

一瞬動きの止まるグリップ（B）。だが下村

地面に勢いよく叩きつけられた。

（D）の身体はその場で半回転し、頭部から

キック（右後ろ回し蹴り）を決める。バレル

外国人たちは、互いに支え合いながら立ち上がり、車に乗り込んだや否や、あつという間に走り去っていった。撤収が異常に速いのが印象的だ。まるで何かの訓練を受けているようにも思えた。

下村は「ふうふう」と、少し穏やかな表情で一息つき、周囲を見渡す。三菱スパーグレートとデリカバンが、**コ**クルーザーとは反対側（峠方向）に走り去っていくのが見えた。そしてレイが、後方から声をかけてくる。

「下村くん：。ありがと。ほんとに助かったよ」

見つめ合う合う下村とレイ。

「まさか高校時代の同級生：、しかも下村くんこんな形で再会するなんてね」

黙って頷く下村。それから静かに語り出す。

「穏やかじゃねーよな。一体何があったんだよ？」

少し困った表情のレイ。

「うん：。何から話せばいいのかな：」

まずは一番気になっていた、正体不明のバ
イクを指差す下村。
「お前さんの専門は、モトクロスじゃなか
ったのかよ？それにそのバイクは一体何なん
だよ。何が起こってんのかさっぱりわかんね
え。」
レイは小さく首を振り、少し思い悩んでい
た。
「ううん。モトクロスはね、スキルアップ
のための訓練。いや、いま思えばこのため
の英才教育だったのかな。」
そう言いながらレイは、下村の顔をじつと
見つめ、学生の頃を少し回想していた。
それは Def busta 下村と呼ばれ、“やんちゃ”
をしていた頃の彼の姿だった。
ゼファール400改に跨り、仲間達と楽しそうに
している光景。そしてそれを、羨望と淡い想
いで、遠くから見つめていた自分の姿も。

何か思いつめたようなレイの表情。そんな回想を振り払い KAMUI 零を見つめながら、ハンドルを握る。

「これまでやってきたバイクの訓練は、全てここに繋がっているの。これは MBM 社を母体とする、新興バイクメーカー、≧ KAMUI ≧が開発した新型のバイクで、コードネームは ≧ KAMUI 零 ≧。そして私が、テストライダーをして

いるの」

下村は、無言で KAMUI 零の各部を、繁々と観察し始めた。

まず特徴的だったのは、黒塗りのタンクに『DUCATI』の偽装文字と、車体は同・モンスタ―と同様の美しいトラスフレーム。エンジン

は前 2 気筒、後ろ 1 気筒で構成された、ㄱ型 3 気筒の空冷風エンジンだった。

更によく観察してみる。その空冷風 3 気筒エンジンにはタンクの隙間から見てみると、ヘッドカバーは、MBM 社のスリッダイヤの形をしていた。しかも後方のテールランプと左右

に振り分けられたマフラーのサイレンサーで
構成されるリヤ回りのデザインも、同じくス
リーダイヤの形をしている。
下村は、思わずため息を漏らしながら頷い
てしまう。
「なるほどね……。で、さっきの連中は？」
レイを見つめる下村。
レイは、そんな下村の視線を逸らす様に、
俯き加減になつてしまう。
「確証はないけど、恐らくはライバル会社
が雇った産業スパイだよ」
「なに一産業スパイだつて？」
黙つて頷くレイ。
「そう。最初は写真を撮られたり簡単な妨
害工作程度だったんだけど……。もうすぐで最
終テストつて時に、直接的な暴力や破壊活動
をするようになってきたの……」
絞り出すように発したその言葉。やり切れ
ない思いを胸に、レイは非常に辛そうな表情
をしていた。

もう黙って見過ごす訳にはいかない。一
それを見た下村の心に、義侠心という名の
灯がともった。突然レイの両肩を掴み、眼を
見据えてこう言ったのだ。
「お前困ってんのか？ 困ってんだな。」
顔を赤らめるレイ。
「え、ええ。：、うん、そうだけ。：。」
ニヤリと笑う下村。
「小難しい事はわかんね。だけどお前に降
りかかる火の粉は、俺が払ってやれるぜ。」
それから自分の左胸に右拳を「トン」と当
て。
「俺がお前を護ってやる。」
そう自信たっぷりに言い放った。
一瞬困惑するものの、直ぐに嬉しそうな表
情になるレイ。
「うん。：でも。：それは。：。」
更に笑顔の下村。
「もう大丈夫だ。一任しとけて。」
下村の強引さは、少々見当違いな感もある

が、レイは黙って頷き、赤い顔のまま自分の足元を見つめた。下村の真っ直ぐな気持ちさがとても嬉しかった。だが、あまりにも照れくさくて、顔を凝視することは出来なかった。今度は下村が、**KAMUI** 零のタンクに“ポン”と手を置く。――それにしても、コイツの戦闘力はスゲーな。でもそれ以上に美しいバイクだ。惚れ惚れするくらいにな――

嬉しそうな表情で頷くレイ。

「うん。ありがと。ほんと下村くんは変わったってないね。お節介で仲間思いで、バイク馬鹿のまんまだね♥」

優しい表情で微笑むレイ。

そしてエンジン部分を覗きこむ下村。

「うーん……。だけど一つわかんねー」

首を傾げるレイ。

「なにが？」

下村はエンジン部分を指差した。

「コイツ3気筒エンジンなのに、エキパイ

が2本しか無えんだ。後ろの1発はいったい何なんだ？」

レイは非常に感心した様子で答えた。

「それこそが『零』の主要部分なんだよ」

今度はKAMUI零のリヤバンクを指差す。

「そのリヤバンクは、北海道のH大学とKAMUIが共同開発した、レアアースを使用しない、超小型の高出力・高耐久、を誇る新型高性能バッテリーなの。だからこそ『零』は、加速性能、旋回性能、航続距離に特化した、新世代のハイブリッドバイクになれたの」

「なんということだ。とんでもない暴露話を聞かされた気分になった。驚き以外の何者でもない。開発中のバイクが公道を走っているだけでも大変な事なのに、コイツには次世代の新技术がふんだんに詰め込まれている、まるで宝石のようなバイクなのだ。下村は言葉を失ってしまふ。」

だが、そんな様子の下村を見てレイは、急に話題を変えた。

「ねっ、それより私、下村くんにお願いがあるの」

髪をなびかせ、楽しそうな表情をしたレイは、とても可愛いらしかった。

「ん？なんだ？」

その笑顔につられ、いつの間にか下村も優しい気持ちで答えていた。

少しはにかむレイ。

「2人で一緒に走らない？ ≪零≫の事もっと知りたいでしょ」

今度は真っ直ぐに瞳を見つめてきた。

「それに下村くん達、学生時代にさ『峠でオールー』とかよくヤッ（走）てたでしょ。私もそれをヤッ（走）てみたいの♥」

と、少々照れながら誘う。

黙って頷く下村。それから峠のワインディングを見つめながら、おもむろに答えた。

「ああ。いいね。今日はオールでヤ（走）ろうか」

今度は悪戯っぽい表情でレイが微笑んだ。

KAMUI

次の日、十勝管内OT町に位置するMBM十勝研究所。そのテストコースが広がる広大な敷地内に、レイは下村を招待した。北海道は、まさしくテストコース王国である。日本車はもちろん外国車、その他、世界各国のタイヤメーカーまで。先進国のあらゆるメーカーが、この地でテストを行うのだ。そんなMBM社KAMUI第三格納庫内で、下村、レイ、堀井が、白いツナギを着た作業員達に整備されている「KAMUI零」を見ながら話をしていた。

堀井は深く刻まれた顔の皺と、長い眉毛に年輪を感じる老人であるが、その瞳の奥底には、只ならぬ雰囲気も兼ね備えている人物であつた。

「下村くん。キミも「零」に惹き付けられてしまったようじゃない」

若干白みを帯びた堀井の眼は、何とも用心深い様子で、下村を見つめていた。しかし下村は何も臆することなく、自分の本心を真つ直ぐに伝えた。

「ああ。それもある。でもそれ以上に、二宮が困ってたから助けたいんだよ」

実際に下村らしい、実直で痛快な答えだった。それを愉快そうに笑う堀井。

「ふおっふおっふおっ。僥倖（ぎょうこう）

「じゃのう。君のことはレイお嬢様から聞いておるわい。仲間思いで、バイクが大好きなガキ大将 ≧ Def busta 下村 ≧。そんな風に呼ばれておったんだってのう。ふおっふおっふおっ

「どうやらこの老人に気に入られた様だが、思わず苦笑いの下村。

「そんな事は別にどうでもいい。それより二宮がお嬢様って、一体どういう事なんだよ？」

堀井はちよつと不気味とも思える“ニツタ

リ”とした妖しい含み笑いを浮かべ、下村の肩にぽんと手を置いた。

「なんじゃ知らんかったのか？レイお嬢様はのう、過去にワシと零戦開発に携わった、MBM社4代目社長・南條輝彦の落とし種。つまり、我社の跡取りとなる方なんじゃよ」

そして、格納庫の大きな扉の外に見える青空を見つめながら、堀井は若き頃の自分と、南條輝彦が、大空で編隊飛行する零戦を、満足げに眺めていた事を思い出していた。

その時レイが、堀井の横で慌てて両手をバタつかせながら言った。

「ちよ、ちよっと待ってよお。確かに子供がいなかった本家は、うちのお母さんが亡くなったあと、私を温かく迎え入れてくれて、今は南條姓になったけど：」

それからレイは、俯き加減で下村を“チラリ”と見たあと、小声で続けた。

「うちのお母さんは：いわゆるお妾で：その子供の私が跡取りなんて：いくらなんでも

荷が重すぎるよお：」
それを聞き、大声でレイに喝を入れる堀井
「んなあゝにを言つとるんじやあーワシ
は現当主代理の洋子様から、レイ様を頼むと
言われとるんじやあーいま南條家の血筋は、
レイ様唯一人」これからはレイ様がMBM社を
背負って立つんじやあー」
そんな大声に気押され、困った表情で下村
を見つめるレイ。しかし下村はそんなレイを
見て、心底安心した様子で言った。
「そっか：、なんか事情は色々あったんだ
ろうけどよ、良い人達に巡り合ったんだな、
二宮」
屈託なく微笑む下村に見つめられ、頬を赤
く染めるレイ。
堀井もその様子を見つめ、何か納得したよ
うに何度か頷いた。
「下村くん、キミはレイお嬢様の恩人じゃ
ゆっくりして行きなさい。なんなら暫く滞在
していても構わんぞ」

それを聞き、急に子供のよう
に瞳を輝かせ

、 20×20

「マジでカジっちゃん
はなんだったらよお

俺もその《零》に乗っても
いいか？」

は、額に一筋の汗を流して
いた。

「ううむ：お前さん：、少
々厚かましい

のう：

本音がポロリと出た。

しかしそんな事は関係なく、
下村は更に瞳

を輝かせていた。

翌日のS峠。そこで深夜の公道テストが行われようとしていた。2台のKAMUI零に跨る下村とレイ。なんと下村の希望が、そのまま通り、《零》に乗る事が許されたのだ。

KAMUI 零に跨った下村は、昨日、堀井に聞いた、このバイクのスペックを回想していた。

堀井は非常に興奮した様子で下村に語った。「このバイクに名付けられた《零》とは、我社の《零式艦上戦闘機》を指し、軽量コンパクトでハイパワー、旋回性と航続距離に特化した、新たななるバイク。始まりの《零》でもあるんじゃない？」

《零》を見つめる下村と堀井。

「零の心臓は902cc、水冷2バルブ2気筒、ツインプラグエンジンと、強烈な電気モーターが内蔵されておる。それに、新開発のバッ

テリーパックとダイナモは、超短時間で充電を完了させる。モーターに切り替えた時の凄まじさは、もう見ておろうに――

黙って頷く下村。堀井は真面目な顔つきで話を続ける。

「その強烈なパワーを受け止めるシャシはクロモリ鋼で形成された、強靱かつしなやかなトラスフレームじゃ。このデザインはのう、レイお嬢様の提案なんじゃ。ギミックの効いた未来的デザインも良いが、バイクがもつともバイクらしく、美しいデザインを採用したんじゃないよ――」

少々いぶかしげな表情の下村。

「ふん。しっかし902ccってよう、まさかKW社の“マジックナイン”の真似かよ？ それに今の時代2バルブって、どうなのよ？」

そんな質問を見透かしたように、妖しく“ニツタリ”と笑う堀井。

「単に他社を真似したんじゃないぞ。何十年も世界中の技術者達が、ガソリンエンジン

を研究した結果、1気筒あたり450ccくらいが
綺麗に上まで回って、下でもパンチの効く最
適値だと分かってきたんじゃないや。もちろ
ん社でものう。そこでスリムかつトルクの
出しやすい、直列2気筒エンジンを採用し、
で902ccとしたんじゃないや。それにのう。時
て2バルブエンジンは、4バルブエンジンを
凌駕することがあるんじゃないや」
堀井の眼光に、更に妖しさが増す。
「その秘密はツインプラグじゃ。知っての
通りツインプラグエンジンは、多少の粗悪ガ
ソリンを入れても、ノッキング等の異常燃焼
を起こさないよう、セッティングすることが
可能じゃからう。言い換えればのう、セッ
トアップをちょいと変えるだけで、世界中の
道のどこでも、容易に走ることができるん
じやよ」
苦笑いの下村。今度は一言皮肉を言ってみ
た。
「アンタ等の親会社は、最近ずいぶんと萎

れているように見えただけど、なかなか面白
えことやってんじゃねーのよ」
それから堀井は、また妖しく“ニツタリ”
と笑って見せた。
そんな昨日の事を思い浮かべながら、下村
はKAMUI零のタンクの辺りを撫でていた。
その時だった。何者かが靴で小砂利を弾い
た音が右後方で聞えた。ほぼ本能的にその音
に反応した瞬間、そこで何かの影が宙に跳び
上がった。
反射的に右腕のガードを上げる下村。しか
し、そのガードは完全には間に合わず、何者
かの跳び蹴りを、首筋に受けてしまった。そ
の蹴りで体勢を崩した下村は、KAMUI零と共に
けたたましい音をたてながら、路面に転がつ
た。
「っだらあーっ」
下村の戦闘スイッチが入る。転がりながら
体勢を整え、片膝をつき相手を見据えると、

そこには小柄なアラブ系外国人・ブリッドが立っていた。　「っんだらテーマーリーニ」　吼える下村。が、次の危機が迫る。視界の端に巨大な左拳のアップリカットが、迫り来るのを見た。　間一髪、辛うじてその拳を両腕でガードしたのだが、その怪力の持ち主、大男のアラブ系外国人・ハンマーは、パンチの力だけで下村の身体を軽々と空中に舞い上がらせた。　「ぬあっ」　思わず叫ぶ下村。それと同調するように、小男のブリッドが、見事なまでの跳躍力で空中に跳び上がるのと同時に、鋭く回転し強烈なローリングソバットを、下村の腹部に深々とめり込ませる。　「があっ」　息を激しく吐き出す下村。地面に叩きつけられ、転がりながらも、必死に体勢を立て直そうと、再度立て膝になった時だった、間髪

を 入 れ ず 、 大 男 の 右 フ ッ ク が 下 村 の 顔 面 を 捉
え た 。
そ の 威 力 、 そ れ は ま る で ス レ ッ ジ ハ ン マ ー
（ 大 型 の ハ ン マ ー ） に で も 殴 ら れ た よ う な 衝
撃 だ っ た 。 そ の 破 壊 的 な 一 撃 は 、 脳 髄 に ま で
突 き 抜 け 、 痺 れ る 身 体 ご と 、 派 手 に 吹 っ 飛 ば
さ れ て し ま っ た 。
し か も 、 そ れ で ハ ン マ ー と ブ リ ッ ド の コ ン
ビ ネ ー シ ョ ン は 終 わ ら な い 。 追 い 討 ち は 、 下
村 が 吹 っ 飛 ば さ れ た 先 に 待 ち 構 え て い た 。 ま
ず 、 ブ リ ッ ド の 左 ハ イ キ ッ ク が 、 強 烈 な 炸 裂
音 と 共 に 右 の 首 筋 を 捕 え る 。
そ こ で 遂 に 下 村 は 、 意 識 が 飛 び か っ た 。
目 か ら は 光 が 失 わ れ 、 酔 っ ぱ ら い の よ う に 、
足 元 が ふ ら つ き 千 鳥 足 と な る 。 そ れ か ら 数 歩
進 ん だ 後 、 急 に 膝 が “ ガ ク ン ” と 折 れ 、 崩 れ
か っ た 時 だ っ た 。 非 情 な ま で の ハ ン マ ー の
パ ン チ が 強 襲 す る 。
そ れ は 打 ち お ろ し の 右 ブ ー メ ラ ン フ ッ ク 。
止 め と ば か り に 、 下 村 目 掛 け て 放 た れ た 。 巨

大な右拳が弧を描き襲いかかる。
「いやあああ――」
その時、遠のきそうになる意識のなか、レ
イの声だけがはつきりと聞こえてきた。
「二：宮：」
下村の身体はその声に呼応した。切れかか
った意識が再び戻ったのだ。眼に光が宿る。
瞬時にいま置かれている状況を理解した。歯
を食いしばり、一歩前に出た足に踏ん張りを
利かせる。それから近寄って来たハンマーの
顎にめがけて、渾身の力を振り絞り、右脚を
鋭く跳ね上げた。
「っだらあ――」
が、惜しかった。決まればカウンターとな
る必殺の一撃だったのだが、その爪先は相手
の顎をかすめただけで、虚しく空を切つてし
まった。
そして一瞬止まった時間のなか、ハンマー
と眼が合う。
「くそったれ――」

“ボゴッ” 巨大な右拳が、下村の顔面に直撃し、そのまま身体ごと路上に激しく叩き付けられる。それで終わりだった。見下ろしていた。もう完全に体がいう事をきかない。下村は薄れゆく意識の中、ブリッドが片言の日本語で、自分への警告を発している。それが聞き取れた。――シロウトガコレイジョウカカワルナ。ツギハコロスー

周囲はKANUIの作業員と、数名のアラブ系外国人達が入り乱れ、乱闘模様になっっていた。目を覚ました下村。視界が狭い。左目は瞼が腫れあがり開かず、固まりかけている大量の鼻血は、顔面を赤く染めていた。

――イテテ：クソッ：――

後頭部を押さええながら、バキバキと音を立てるように痛む体に鞭を打ち、やっとの思い

で起き上りながら周囲を見渡した時、驚愕の
事実を目の当たりにして、思考が固まってし
まった。
そこには、KAMUI社の全員が顔に痣を作り、
道路上に座り込む姿と、バラバラに破壊され
屑鉄と変わり果てた、無残なKAMUI零の姿があ
ったのだから。
「いやああー」
レイは口元から一筋の血を流しながら、破
壊されたKAMUI零のパーツを手に、悲痛な慟哭
をあげ続けていた。
「どうして：どうしてなの：こんないや
だよお：」
流れる涙から、痛々しいほどの想いが伝わ
ってくる。
「くそつたれが：」
激しく齒軋りをした下村は、やりきれない
想いで一言吐き捨てた。

決戦

3 日後、KAMUI 社は T S W（十勝スピードウェイ）を借り上げ、KAMUI 零の最終テスト走行を行っていた。

KAMUI 零は、合計で 3 台の車両が造られていたため、最後の 1 台が襲撃の難を逃れていたのだ。そして最終テストがここ、T S W で実施されることとなったのである。

飛行機のジェットタービン音にも似た、全開で走る KAMUI 零のモーター音は、サーキット内に軽快なドップラー効果を響き渡らせ、順調に周回を重ねていた。乗り手はもちろんレイである。

KAMUI 社の作業員達は、サーキット内の各部に散り、その様子を見守っていた。

そしてピット内では、アウトドアチェアに腰掛け、コーヒーを飲んでいる下村と堀井の姿があった。その近くには下村の愛車 Z1000MK2

が置かれてある。堀井は、顔じゅうガーゼの絆創膏だらけで
ふて腐れた下村を愉快そうに眺めていた。「
随分と暢気な調子だ。更には。」「しかしこっぴどくヤラれたもんだのう」
「しかしそれほどヤラれて、ただの打撲程
度とは違う。お前さんの身体はそのバイクと同様に、随分と頑丈なようじゃのう」
などと感心した様子で Z1000MK2 を見つめる。
それからまた下村に向き直り、今度は真面目な表情となつた。
「それにしても彼奴ら、《零》を破壊したばかりに止まらず、レイお嬢様に怪我まで負
わせおつてからに。許せんのうー」
怒りの言葉を吐き捨てた。
『ズズ：』言葉を失い、コーヒ―を黙つて
啜る下村。
「だがお嬢様の怪我が、大したことなく
たのは幸いじゃわい。それに零も最後の1台
は無事じゃつたしのう。その場に居合わせ

な かつたのは不幸中の幸い……。小さな僥倖（
ぎ よ う こ う ）じゃったのう」
顎髭を撫でながら、難しい顔をして堀井は
続けた。「どうにも痛い所を刺激され、忌々し
げに堀井を見つめる下村。
「あいっ等『ツギハコロス』なんて言いや
がったが、そりゃこっちの台詞だ」
また難しい表情で下村を見つめる堀井。
「いや：、確かに。これ以上キミは関わら
ん方が良いのかもしれない」
が、即座に鋭い視線で堀井を睨む下村。そ
の眼光の鋭さは、堀井を一瞬たじろがせるほ
どだった。
「ふざけんな。こんな状況で二宮を放って
おけるかよ」
「ふう」と、一息吐き、腕を組む堀井。
それから下村は急に寂しそうな表情になり
小さく呟いた。
「俺が死んだって誰も悲しまねえよ。それ
に唯一生きてる親父だって：居ねえも同然だ

明らかに周りとは違う空気感が漂っている。
KAMUI社の作業員と同じツナギを着ているが、
構える2人の人影があった。その2人組は
同時に、T・S・W・南パドック付近。
そこには物影に潜み、ストップウォッチを
いに飛びまわるんじゃないか？
「しかし何故じゃろう？今日はパパラ
ッチの空撮ヘリが、1台も飛んでいないのう
サーキットを借り上げた時は、五月蠅いくら
いかに飛びまわるんじゃないか？
掘井はその音を聞きながら、遠くを見つめ
の軽快なモーター音がピット内に響き渡る。
そんな下村の言葉に呼応する様に、KAMUI零
ねえ。次はきっちりケリをつけてやる。」
「だけれどよお、俺は友達をゼツテー見捨て
語気を強め掘井に言った。
それから右拳を左掌に一度打ちつけてから、
何かを思い、次の言葉は深く飲み込んだ。
：あんな奴：」

バックストリートを駆け抜けて行くKAMUI零
ストックプウオッチを押す人影。
そんな時、コース外のエスケープゾーンを
見回っていた3人のKAMUI社・作業員が、その
不振な連中を発見した。
最初に声をかけたのは、稲葉という作業員
だった。
「オイ何やってんだ」
その声に振り向く2人の不振な作業員。そ
れは、KAMUIでは見た事もない人間の顔であつ
た。
稲葉が詰め寄る。
「お前ら誰だ」
するとその偽装作業員は“クルリ”と向き
を変え、パドックの出口方向へ逃走を始めた
「オイちよつと待て」
その場にいた稲葉、大谷、中田の3人は、
その2人を追いかけた、が、辺りの
茂みや物陰から、4名のアラブ系外国人・フ
ロントサイト、グリップ、トリガー、バレル

が現われ追跡を阻んだ。
そしてニヤニヤと、薄笑いを浮かべる外国
人達。稲葉は驚いた様子で叫ぶ。
「あっ、お前らこの前の」
「オイッわかつているのかーお前達のやつ
ている事は犯罪だぞ」
更に稲葉は、怒鳴りながら不審な2人を追
おうとするが、外国人達に行く手を阻まれる。
そんな騒ぎを聞きつけ、近くにいた数名の
KAMUI 社・作業員達が、その場に集まって来た。
しかし、それでも“ニヤニヤ”と薄ら笑い
余裕を見せる外国人達。
それから程なくして、その余裕の理由を知
ることになる。それは、まだ他に強力な増援
がいたのだ。
なんと、またもや4名もの外国人が集まっ
て来たのである。その中には下村を痛めつけ
た、ハンマーとブリッドの姿もあつた。
突然ハンマーが、アラブ語で短く号令をか
けた。

「●×▽」
外国人達は、一斉にKAMUI社の作業員達に殴
りかかった。
稲葉が自分の仲間に大声で伝えた。
「オイ、あの逃げていく2人を捕まえろ」
たぶんコイツ等の黒幕だ」
「お前等あーあー」
「応援を呼べー」
KAMUI社・作業員達の怒声が飛び、その場は
乱戦模様となっていた。
更に同時刻TSWピット内。
堀井がアウトドアチェアから立ち上がり、
ピットボードを用意していた。
「さて、そろそろレイお嬢様をピットイン
させるかのう。キミも走る用意をしておいて
くれ。やはり一般人のデータも欲しいので」
「わかった」
下村は短く答えた。それから着替えのため
その場でTシャツを脱ぎ放つ。するとそこに

は均整がとれ、しなやかながらも力強く、引き締まった肉体美が現われた。それからスキンのアンダーウェアを着用し、走り出す準備をする。

堀井は、思わずその肉体に魅せられていた。そして感嘆の言葉を呟く。

「ほお、惚れ惚れするのう。見事なまでの身体じゃわい」

下村は、さも面倒臭そうに言った。

「まったくうるせえジジイだなあ」

愉快そうに笑う堀井。

「ふおっふおっふおっ」。

その時、突然無線が鳴った。

『ピীগガ、南パドックに応援頼む。一例の外国人達が暴れている。』

「なにいは」

堀井が叫び、急いで無線を取る。

「わかった今すぐ応援を出す。」

そう答えながら、その場で下村の方へ振り返る。が、そこに下村の姿は既にない。

「下村く……ん……」
突然 Z1000MK2 のセルが回り、KERKER KR 管から
炸裂音にも似たエキゾーストノートが激しく
吐き出され、ピット中に響き渡った。そこに
はバイクに跨る下村の姿があつた。
数度アクセルを捻り、少々荒っぽくクラッ
チを繋ぎ、暴れるリヤタイヤをコントロール
しながら、ノーヘルのまま走り出す。
ピットを抜け、コースに入った途端、フル
加速でタイヤスモークと共に走り去る。
バタバタと慌ただしくなるピット内。堀井
はおもむろに、南パドック方向を見た。
「うむ……。頼んだぞ下村君」
南パドック付近では 8 人の外国人と KAMUI 社
の作業員 10 名が、双方入り乱れての乱闘とな
つていた。
しかしながら、KAMUI の作業員達は押され気
味で、外国人側が優勢な状態となつていた。
その中、主だって暴れているのは、例のハン

マ―とブリッドのコンビである。
そこでハンマーが、**KAMUI**の作業員・大谷を
捕まえ、片腕のみで空中に吊りあげた。足を
バタつかせ、その拘束から逃れようとする大
谷。しかしハンマーの手は、まるで万力のよ
うな握力で、獲物を捕らえて離さない。
ブリッドが跳躍の構えに入る。大谷に跳び
蹴りを見舞おうと、膝を曲げて溜めをつくる。
が、そこで突然、2人の視界の端に、一台の
バイクが映り込んできた。
そこに響き渡ったのは、凶悪なエキゾース
トノート。**Z1000MK2**が、ハンマーとブリッドの
間に突っ込んできた。
ブリッドは辛うじて後方に跳び退けたが、
ハンマーは尻餅を付き、大谷への拘束を緩め
てしまった。彼は息が詰まりそうな状態であ
ったのだが、咳き込みながらも間髪を入れず
怪力のハンマーから必死で逃れた。
リヤブレーキでタイヤを滑らせながら、車
体を横にして停車する下村。バイクを降り数

強　　る　　た　　た　　の　　　　　右　　き　　　　　後　　み　　下　　る　　　　う　　　　　顔　　歩
烈　　。　　ま　　骨　　顎　　下　　「　　の　　で　　右　　ろ　　せ　　村　　。　　ぜ　　「　　睨　　の　　、
な　　そ　　ま　　が　　を　　村　　っ　　コ　　一　　足　　に　　る　　し　　『　　み　　絆　　ハ
一　　れ　　ま　　が　　正　　必　　だ　　ー　　氣　　で　　に　　。　　か　　』　　合　　創　　ン
撃　　は　　後　　が　　確　　殺　　ら　　ク　　に　　地　　あ　　ブ　　了　　膏　　マ
だ　　一　　方　　が　　に　　の　　あ　　ス　　間　　面　　ー　　リ　　ッ　　を　　“　　と　　ブ
っ　　瞬　　に　　音　　右　　ー　　合　　を　　た　　。　　を　　、　　ハ　　人　　。　　バ　　リ
た　　の　　転　　と　　拳　　ー　　い　　。　　が　　、　　を　　、　　下　　リ　　ッ　　ド
。　　出　　回　　、　　は　　、　　、　　、　　、　　村　　”　　と　　に
来　　り　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、
事　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、
で　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、
あ　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、
り　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、
、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、
あ　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、
ま　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、
り　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、
に　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、
も　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、　　、

「ふんっ」
一息吐き、次に下村は、ハンマーの方へ向
きを変え、右手で『来い』というジェスチャ
ーをして、サウスポールのヒットマンスタイル
に構えた。
ハンマーは眉間に深くしわを寄せ、凶悪な
表情で片言の日本語をつぶやく。
「オマエハコス……」
今度はハンマーが、鈍重なフットワークで
下村との間合いを詰め、強烈な右ストレート
を放ってくる。
下村はそのパンチを、左ダッキングで交わ
しつつ懐へ掻い潜り、同時に腰を鋭く回転さ
せ渾身の左ショベルフックを、相手の右脇腹
・レバー目掛けて打ち込む。しかしハンマー
は、右膝を持ちあげた脚のブロックで、容易
くブローを止めてしまった。だがそこで攻撃
の手は緩めない下村。間髪を入れず、右のブ
ーメラックを顔面に向け打ち込むが、そ
れもブロックされてしまう。

空から、左アッパークットのコンビネーション
放った後、大本命である、地を這うような低
トである左右のワンツート、右ローキックを
いフットワークで力強く詰め寄り、フェイン
すハンマー。そしてまた、サイのように重た
右の口角を吊り上げ、歪んだ笑みを漏ら
間から、ハンマーを睨みつける。
いを取る下村。両腕に痺れの残るガードの隙
強烈な一撃だった。バックステップで間合
下げたのだ。
の身体を、易々と約1メートルも後方へ押し
強いその威力は、地面に踏ん張っている下村
ドで蹴りを直接受ける。しかし余りにも力
それには流石に避けきれず、両腕のクロスガ
村の胸元に飛んだ。
が次には、ハンマーの右フロンティックが下
それをスウェイバックで軽くいなす下村。
フックを飛ばしてくる。大きく弧を描く左拳
た左腕で下村の右拳を払い退け、そのまま左
そこからハンマーの反撃が早い。ガードし

ンブローを放ってきた。
右ローのフェイントを、脚でガードした下
村は、目を“カッ”と見開き、今度は左足で
鋭く地面を蹴り、自分の身体を右前方へ瞬間
移動するかの如く飛ばし、間欠泉の様に吹き
上げてくる凶悪なハンマーのアッパカット
を交わす。その拳は唸りを上げて空を切った
そして下村のしなやかな肉体が、宙へと舞
った。
そこからはハンマーが感じた、長い長いス
ローモーションのような瞬間。破滅への序章
であった。血走った目を“ぎよっ”と見開く
そこで目にしたものは、下村が自分の横で、
木綿布の如く軽やかに“フワリ”と跳び上が
る様だった。
『ムリダ：カワセナイ：』ハンマーは心の
中で眩き覚悟した。
「っだらぁー！ー！ー」
下村の気合一閃
その声は、全てのものに喝を入れ、半ば強

制的に、ハンマーの刻をも動かし出した。
交わし切れないそのスピード。驚異的な全
身のバネから繰り出される、強烈な右の跳び
膝蹴りが放たれた。
ほんの一瞬だった。瞬き数回にも満たない
くらい短い瞬間。下村の右膝はハンマーの
顔面に深くめり込み、嫌な音が彼の頭の奥に
響いた。それからその巨体は、フラフラとそ
の場を漂った後に膝が折れ、土埃を舞い上が
らせながら、前のめりに地面へ倒れ、真っ暗
な闇の中に意識が沈んでいった。
下村は、地べたで小さく痙攣し、失神した
ハンマーを見下ろしていた。
「ふんっ」
それからゆっくりと周囲を見渡す。KAMUI 社
の作業員達は、多少の怪我をしているものの
大事は無い様子で、外国人達全員を取り押さ
えていた。
「ふう」一息つき警戒を解く。
「皆なかなかヤルじゃねーのよ」

1

下村は少々驚いた様子でガードを解く。そこで目にしたのは、**KAMUI** 零に乗ったレイの姿だった。ヘルメットを脱いだレイは怒りの表情で、瞳に涙を溜めていた。

「零の仇よー！ー」

誰とはなくそう叫び、今度はぼろぼろと大粒の涙が頬を伝った。

「うっ…うっ…うっ…」

緊張が切れたのだろう。いろいろな感情が込み上げて来る。

下村はそんなレイを、そっと抱き寄せ、優しく抱擁した。

「もう大丈夫だ…大丈夫だよ」

何度も何度も優しく語りかける。レイは下村の胸で、小さく震えていた。

決
断

そんな襲撃事件から一夜明け、十勝晴れの
抜けるような青空が広がった日、その事件は
MBM 十勝研究所・KAMUI 社格納庫内に曇天模様
を落としこんだ。
皆の前で電話を受けているレイ。心配そう
な面持ちの作業員達。それから、少し離れた
位置の作業台には、下村が腰からもたれかか
っていた。
その暗雲たる原因の電話主は、今回の事件
の黒幕であつたから他ならない。電話口の向
こう側は他社の重役室。そこへ、電話の主が
窓際に自分のシルエットを落とす。
無言のレイ「
」
そんなレイに電話主は、上から見下ろすよ
うな口調で語ってきた。
「さて姫君。もう貴女の出番ではないです
よ。堀井さんに代わって頂けますか？」

者の余裕でもあった。相手を自分の思い通り、
これはビジネスという名の狩り、そう、捕食
『詰みだ』そんな言葉が彼の頭をよぎる。
いにしておけば良いのですよ」
技術を投入しても、他社の製品と同性能くら
「抜きん出た高性能は必要無いのです。新
「ふう」とのんびり煙を吐く電話主。
して、行っているだけなのです」
す。それを伝える憎まれ役を、私どもが代表
界中のバイク・クルマメーカ―の意見なので
「そのとおりですよ姫君。しかしこれは世
火を点ける男の姿がある。
電話の向こう側では、余裕の態度で煙草に
レイの周りで作業員達がどよめく。
はうちの親会社も理解していると：」
「出力を50%も落とせと仰るのですね。それ
いるのね：エンジンをして、バッテリー
「貴方がたは『零』の性能ダウンを望んで
震える唇で彼の言葉を復唱した。
レイは受話器を握る手に力が入り、怒りに

手の平で転がしながらコントロール化におく
時に希望も与えながら、一気に地獄へ叩き落
とすべく狙いをすまし、獲物の息の根を止め
る。
ほぼ想定内で動いている自分の計算高さに
満足し、そんな自己陶醉から彼は、右の口元
を嫌らしく吊り上げ、もう一度心の中で「詰
みだ」そんな言葉を呟いた。
固く結んだ口元に力が入るレイ。
ニヤニヤと勝ち誇り、下卑た笑みを漏らす
電話主。
「貴方がたの『零』は言わば驚異なのです
その新技術で存在が脅かされる会社が沢山あ
るのです。国内だけではなく、石油輸出国や
レアース提供国との、国交問題にすらなり
かねない事態なのですよ」
また煙草の煙を一息吐く。
「発売するなと言っている訳ではありませ
ん。譲歩策のご提案をしているのですよ」
今にも高笑いしたい衝動を必死に抑え、言

葉だけは冷静に吐き出す。
「さあ、お分かり頂けたら堀井さんに代わ
って下さい姫君」
その時レイは、自分の中で何か“プツン
”と切れたのを感じ取った。目を大きく見開
き、突然声を張る。
「ふざけたこと言わないで」
無言で目を細める電話主。
更に吼えるレイ。
「良い物を造りたい」世界一の物を造りた
い。そんな技術屋の想いをないがしろにして
お金儲けや外交しか考えないアナタ達には、
もうウンザリよ」
一度大きく息を吸い再度咬みつく。
「絶対アナタ達の好きにはさせない」これ
からは私が全てを背負って立つんだからあー
ー
それはおおよそ人との争い事を避け、あ
まり目立たぬよう、控えめに歩んできたレイ
の人生において、初めて牙を立てた瞬間であ

「は、当分の間ウチで独占させて頂きます。特
「かし気が変わりましたわ。この新技術
の様相を隠し、至って冷静に語り出した。
「ふうくく」一息深呼吸したレイは、怒り
き、エールを送った。
中で『お嬢様：ついに目覚めたのか？』と眩
驚いた表情でレイを見つめる堀井は、心の
「それは新しい時代のためなのよ」
次には、机を掌で強く叩き言い放つ。
衰退しつつあるこの国の産業のために「
「それは世界中のバイク乗り達のために、
≪零≫を見つめるレイ。
でしたのよ」
は、この技術を独占するつもりはありません
「そうそう。一つ言っておきますね。私達
かべた。
それからレイは『ふっ』と口元に笑みを浮
まだ無言の電話主。
の殻を破り、捕食者への反撃に転じたのだ。
った。絶対に許せない相手への怒りが、彼女

に貴方がたにはお教えしません。ねっ、**田**社の
重役さん：。確か府月（ふづき）さんでした
よねえ」
電話主にとっては想定外の事態が発生した
努めて冷静を装うのだが、動揺は隠しきれな
かった。
『**三**』慌てた様子が言葉に出る。
「な、なんの事だ？」
不適な笑みでレイは続けた。
「以前お会いした事がありましたわよねえ
なんとなく声に聞き覚えがありましたの。あ
と、粗暴な外国人のご友人達にも、よろしく
お伝え下さいませ」
そしてレイは、非常に荒っぽく受話器を叩
きつけ通話を切った。
“シン”と周囲が静まりかえる。
そんな中おもむろに、作業員の稲葉が口を
開いた。
「エンジンが600ccで、バッテリー出力20%
ダウンって：いったい：」

堀井も重たい口を開く。
「確かに本社から、その旨の連絡があった
わい：。そこでこの電話だ：」
皆が下を向いてしまった。重い敗戦ムード
が漂う。
しかし、それに見兼ねたレイが、懸命に明
るく振舞った。一人ひとり全員に声をかけた
「大丈夫だよおーこれまで皆でやってきた
事は、絶対無駄にはさせないから：」
同じく、作業員の中田も口を開く
「でも本社が：もうどうすること：」
涙が流れそうになる。だがここで引くわけ
にはいかない。レイは必死で皆を励ました。
「皆で現場の想いをぶつけようよ：本社だ
って絶対に分かってくれるよお：どうしたの
っ堀井さんまでそんな顔してえ：」
レイの懸命さが痛々しかった。「完全にヤ
ラれた：」辛そうな表情の堀井。
「お嬢様：」
まさしく絶望の一言だった。本社の意向に

逆らってまでこの開発は続けられない。まし
てや他メーカー各社による圧力。足掻らいよ
うのない、権力によるメガトン級の一撃。完
全なる負け戦だった。重い雰囲気に含まれる
一同。ついにはレイまでもが、言葉を失いか
けた時だった。
突如後方から能天気な下村の声が届く。
「別にいいじゃないかよ」
全員が一斉に、下村に視線を移した。先ほ
どと同じ態勢で、作業台に腰からもたれかか
っっている下村。
「スケールダウンしたっていいじゃないか
まずはお世に出さなきゃ始まらねーよ。それ
に」
思わず息をのむレイ。
「それになに？」
下村は自信に満ちた満面の笑みを見せる。
「それに、カスタムで元の性能を、すぐに
取り戻せるようにしときゃいいじゃないかよ
KAMUI社のカスタム部門とか作ってよお。あ

た等の親会社じゃ○リーアトだったか？他
にも、○スモとか、○ロとか、色々あるじ
やねーの。そう考えるとよお、なんだかワク
ワクしてこねーか？」
一瞬の沈黙の後、そこで一気に空気が変わ
った。
レイは、今にも泣き出しそうだった表情か
ら一変、笑顔がこぼれ落ちた。作業員達の表
情も一気に明るくなる。
「そうか：そうだよな：その手があったか
：それなら本社の意向にも逆らわず、こちら
の事業拡大にも、繋げていく事が出来るぞ：
スケールダウンしたって≪KAMUI 零≫は健在な
んだ：」
感心した様子の堀井。
「ふう：。全くなんて奴じゃ。本当に恐れ
入るよ下村君」
瞳を輝かせる下村の、屈託ない笑顔がそこ
にあっただ。
それから堀井は『まいった』という様子で

や	、		高
二	正	一	ら
が	し	が	か
あ	く	あ	に
っ	僂	っ	大
は	倅	は	笑
っ	じ	っ	い
は	や	は	を
っ	の	っ	始
は	う	は	め
っ	一	っ	た
は	全	。	。
っ	く	僂	
は	た	倅	
」	い	へ	
	し	ぎ	
	た	よ	
	も	う	
	ん	こ	
	じ	う	

モーターサイクルショー
明けて翌年の3月。東京モーターサイクル
ショー20XXが開催された。
会場内は超満員の大賑わい。一般客にマス
コミ。いつになく盛大な様子で、**KAMUI**のブ
ス。特に注目を集めていた。
その時アナウンスが叫んだ。
「**KAMUI**ブース」
注目のステージには、白いベールがかけら
れた、1台のバイクあった。
「今ここに、新時代モーターサイクルの登
場だ。お待ちに待ったそのバイクの名は『M
S T 零』だ。――」
その合図と共に、2人のキャンギャルが白
いベールをめくる。同時に観客からは、歓喜
のどよめきが起こった。
中からは金属光沢・白銀色の『零』が現わ
れ、斜め下から照射したライトは、とても神

々しく ≪ M S T 零 ≫ を光輝せていた。
 それから一斉に、無数のフラッシュが発光
 し、ファンファーレの如くそのバイクを祝福
 した。そう、あの時の雷鳴のように。
 その会場、そのブースはひとときわ熱気を帯
 び、いつまでも歓声が絶えなかった。
 モーターサイクルクルション会場の屋外。その
 道路脇には、荷物がパッキングされた Z1000MK2
 が、黄昏の夕陽に照らされ佇んでいた。
 そこへ、デスペラーードジャケットを着た下
 村が歩み寄り、おもむろにエンジンがかかる
 軽くセルが回り、Z と呼ばれるバイク特有の
 虎が喉を鳴らすような「ゴロゴロ」という、
 野太い排気音とメカノイズが響いた。
 不意に、スリムなダークスーツに身を固め

ケリ

た姿のレイが、下村の後方から声をかけてきた。
「下村くん。やっぱり来てくれたのね」
嬉しそうな表情のレイ。下村も屈託のない笑顔を見せる。
「おう。もちろんだよ二宮。格好良いデビユ―だったじゃねーか」
レイは少しはにかみながら答えた。
「うん。それも全部下村くんのお陰だよ」
手をヒラヒラとさせる下村。
「はっは。俺あ何にもしてねーよ」
「あっーそうだ」
レイは大切な事を一つ思い出した。
「そういえば≧MST零≧の意味、まだ言
ってなかったよね」。
「ん？」という表情で軽く頷く下村。
そこで夕陽をバックにしたレイが言った。
「とても大事な事よ、よく聞いてね♥」
少し溜めをつくる。次の言葉は。

「MBM SPECIAL TRADITIONAL ZERO（MBM社の特別な伝
統の零）、そしてMY DEAR PARTNER OF SIMOMURA TAKASHI
（親愛なる相棒・下村貴）そのイニシャルか
らM S Tにしたのよ♥」
急に顔が真っ赤になった。照れ笑いの下村
「なんだよオイ。こっ恥ずかしいこと言っ
てんじゃねーよ」
その様子を見て、腕を後ろに組み、楽しそ
うにするレイ。
「私ね、あのとき下村くんが現われてくれ
て、本当に嬉しかったの」
また「うん？」という表情の下村。
それからレイは頬を赤く染めた。
「私ね、思わず神様に感謝しちゃった。だ
ってね、高校の頃ずっと憧れていた下村くん
が突然現れて、私の事を助けてくれたんだも
ん」
こういう場面には慣れていない下村は、非
常に照れくさくてたまらなかつた。
それから、おもむろに空を見上げるレイ。

「私ね、南條の名前がずっと重かったの……」
だから下村くんが、昔と変わらず、私の事を
二宮って呼んでくれて、本当に嬉しかったの
「軽く頷く下村。」
「そっか……」
“すっ”と下村に近寄るレイ。
“だからね、私も下村くんがよく言う“ケ
リ”をつけたいの”
それからレイは、左の掌で下村の目を覆つ
た。少し冷たいが柔らかい掌の感触がとても
心地よい。しかし、やはり照れてしまう。
「はは。何やってんだよ」
そういう言いながら、レイの手を優しく握り、
ゆっくりと引き離れたその時、突然レイが下
村の唇に自分の唇を重ね合わせた。
全ての時が止まり、そこには2人だけの、
濃密で甘美な世界が広がった。胸の高鳴りが
体温を急上昇させる。
そうして2人の唇がゆっくりと離れ、互い

に見つめ合う。
それからレイは優しく微笑み、瞳から溢れ
出た一筋の涙を、指先で軽く拭いた。
「これが私からのお礼。そしてまだ二宮だ
った頃の、自分へのケリ」
更に見つめ合う2人。
「二宮：」
下村は言葉に詰まってしまった。
「これでようやく、私の青春時代にもケリ
がつけられたよ」
やはりレイの微笑みはとても優しい。
そんなレイがとても愛おしかった。このま
ま強く抱きしめ、この場から連れ去ってしま
いたい。下村はそんな衝動にも駆り立てられ
ていた。だが、KAMUIで幸せそうにしていたレ
イの笑顔や、堀井達作業員の笑顔も、同時に
思い出していた。
『ダメだ』心で呟く。
下村は、そんな自分だけのチンケな想いで
レイの幸せや、KAMUIの未来を壊す訳にはいか

ない。そうとも思った。辛かった。心が張り裂けてしまいそうだった。だが、そんな想いを振り切るように、手に取ったヘルメットを被り、レイに一つだけ確認をした。

「そっか……。覚悟したんだな二宮……。いやこれからは南條零：か」

2人はまた見つめ合った。

コクンと頷き、下村の目を真っ直ぐ見つめる美しいレイ。いま2人の胸には、さっきまで近くにいた筈の大切な人が、急に遠くに行ってしまう。そんな悲痛な想いが、何度も何度も行ったりは来たりと、去来していた。

精一杯の痩せ我慢。

「じゃあな：レイ」

愛しさ、切なさ、もどかしさ、はち切れんばかり想いを胸に、最後の台詞を発する。

レイは最高の笑顔で応えた。

「ふふ。ようやくやくだね。初めて名前と呼んでくれた♡」

『レイ』一度領き全てを飲み込んだ。それからアクセルを捻り、クラッチを繋ぐ。今は相棒の咆哮だけが心のバランスを保つかんフル剤となっていた。決して振り返りはしなかった。下村は軽く左手を上げ、夕陽に向かい走り出した。レイは瞳に涙を浮かべながら、いつまでもいつまでも、下村の姿を見送った。『さようなら。私の ≧ Def busta ≧ …』

すぐ近くの建物の影。そこに隠れ、2人を忌々しげに見ていた男がいた。口元には悔しそうな表情を滲ませ、激しく歯ぎしりをしていた。そしてさっきまで喫していた煙草を、手の中で握り潰す。

男は手に火傷を負ったが、そんな肉体的苦痛は、今回受けた屈辱を思うと、毛先の痛みほど感じないくらいに、怒りに打ち震えていた。

それから前に歩き出した男は、物陰から出

てその全貌を現す。まだ三代半ばで、とても端正な顔立ちをしている。だがその男こそ、下村とレイにミソを付けられた、田社の重役

府月（ふづき）本人であつた。

「Def busta 下村か……。その名前、よく覚えておくぞ」

府月は鋭い目つきで、走り去る下村を睨みつけていた。

あとがきのようなもの

むらうち 2

長々とお付き合い頂き、本当にありがとうございます。
ございます。また、当時勢いだけで書いたような乱筆乱文の嵐を、最後まで読んでくれた方や、本作品に関わって頂けた皆様に、この場をもちまして、再度心よりお礼を申し上げます。

さて、Defbustaはこの後も第二章 Recovery line（輪道成海編）、第三章 legacy（リース編』ここから主人公の一人称』と続き完結編へと突入します。そこで折角ですので、主人公・下村と当方の事を少々紹介させていただきます。自分の中でこの人物が登場したのは、いまから20数年前、当方が22歳の時でした。某全国誌の「ローライダー・AMAスーパバイ

ク列伝」に当方のKZ1000MK-2が載ったことに端を
発します。当時、諸事情から本名を伏せてオ
ーナー名を「下村貴」とさせて頂いたのが、
彼の誕生の瞬間でした（笑）
それから、ワープロ（当時㊤）のキーボー
ド練習を含め、このバイクを通して知り合っ
た人や物事を、下村目線で面白おかしく日記
のよう書きだしたのが「むらっち劇場」の
始まりでもありました。
当初「下村貴」は当方の分身でした。しか
し時が進むにつれ、親友の良いところであっ
たり、憧れるような人物であったり、あらゆる
人達の良い部分を吸収し、現在の主人公が出
来上がったのです。
それからそれが過ぎ、25歳の頃、ひよんなこ
から当方の「むらっち劇場」を読んだ友人か
ら、面白いから何かにつけて投稿してみなよ
どと言われ、調子にのった当方は、無謀にも
某雑誌の「マンガ原作大賞」に応募するよう

になりました。そしてそんな挑戦を続け、10年が経過した頃、みんなカラでお知り合いになれた「しんむらけーいちろー先生」にマンガ原作の書き方の手ほどきと、参考書籍の情報提供を頂き、個人的に懇意にさせて頂いている、元 **KAWASAKI** ・ **N** デザイナーの多田先生から、 **N** 開発物語の裏話なんかも教えて頂き、当時実際にあった事件なんかも途中途中に織り交ぜ、みんな友達さんである「メリーセブン3号」さんにも物語を読んで貰い、多数のダメ出しを頂きつつ（笑）ようやく完成させたのが、今回の「Defbusta 第一章」なのです。よく、どの辺が当時あった事件なの？という質問を頂きますが、そこは物語を読みながら、どこがそうなのか想像し楽しんで頂けたら幸いに思います。そして、この物語を読んで「面白いからウチの雑誌に載せませんか？」と誘ってくれたのが、現カールビート統括本部長のノッシーさんでありました。そうして「Defbusta 下村」は

陽の当たる場所へと躍り出たのです。これこそまさに「足かけ10年」ですね。

今回、Wakaさんからお願い＆説得を受け、貴兄が運営するWEB「Z car DAYS」に当方の作品を掲載して頂くにあたり、再編集をしながら物語を読んでいると、とても恥ずかしい気持ちになりました。今ならこんな書き方しないのになあとか、あゝソコはそうじゃないだろーとか、ソコはこうだーとかとか色々ですね（笑）

しかしながら、どんどん編集が進むにつれてその恥ずかしさと共に、自分の中で少し白けていた気持ちに喝が入りました。この物語を書き上げた時の熱い気持ちが無クムクと湧き上がってきているのです。希望・大望・願望・野望・野心・大心・大志。そんな気持ちが高き出し、創作に対するモチベーションの高さに繋がってきていたりします。

ですので、冒頭でもお伝えしたように、恥

を忍んで可能な限り大きな修正は加えず、自分自身への喝のつもりもありつつ、少しでも当時の熱意なんかも感じて頂けたらーと思います、い、一部の人だけではなく、多くの人の目に触れて貰おうと、発表させて頂いた次第なのです。

まだまだ進化の途中、夢の途中です。今後も精進を続けていきますので、読者の皆様に何かれましては、飽くことなくお付き合い頂けることを切にお願いいたしまして、一先ずは第一章の幕を閉じさせて頂きます。

2016 年 11 月 吉日